

熊本市立幼稚園の「ことばの教室」の果たした役割

— 1982年から2006年までに焦点をあてて —

古田 弘子*・木山 夢菜**

Development of resource rooms for children with speech impairments at Kumamoto City kindergartens: Focusing on the years 1982 to 2006

Hiroko Furuta*, Yumena Kiyama**

(Received October 1, 2022)

By clarifying the process of developing of Resource Rooms for Children with Speech Impairments (RRCwSIs) at Kumamoto City kindergartens, the study highlighted the roles of the RRCwSIs in public kindergartens.

Through an analysis of related documents on kindergartens with RRCwSIs and interviews with five former/present teachers, three stages were identified in the development of RRCwSIs in Kumamoto City; firstly the Ground Breaking (GB) period (1982-1983), secondly the Buildup period (1984-2006), thirdly the Upgrading period followed by the Special Needs Education reform (2007-2021). Of these three stages, the study focused on the GB and Buildup periods. During the GB period, since the system for supporting young children with speech impairments had not been established yet, an RRCwSI was implemented to meet the various needs of young children of both kindergarten age and younger. Next, during the Buildup period, a rapid increase of applicants who are interested in the RRCwSI was observed, interviews with the children/parents as well as developmental tests were applied before accepting them, and new methods of teaching were developed such as group teaching.

In conclusion, RRCwSIs in two kindergartens in Kumamoto city suggest a dual roles of public kindergartens: firstly for supporting the development of speech and language of young children as a professional institution, and secondly for implementing teaching practices based on the characteristics of kindergartens.

Key words: Resource Room, Children with Speech Impairment, Kindergarten, Kumamoto City

I. 問題と目的

1. 幼児ことばの教室の展開過程

公教育における言語障害特殊学級¹⁾が最初に開設されたのは、1958(昭和33)年宮城県仙台市通町小学校であり、翌年には千葉県千葉市院内小学校に「言語治療教室」が設置された(松村・牧野, 2004)。制度上は特殊学級ではあったが、指導は実質的に「通級方式」で行われていた(田中・滝澤, 2015)。以下では、言語障害児を対象とする特殊学級・通級指導教室・地域療育を総称して「ことばの教室」と呼ぶ。

1962(昭和37)年の通達「学校教育法および同法

施行令の一部改正に伴う教育上特別な取り扱いを要する児童・生徒の教育的措置について」後は言語障害を含む特殊学級の配置数が増加していった(田中・滝澤, 2015)。1967(昭和42)年には、文部省の「第2回心身障害児の調査」が行われ、言語障害等の児童生徒への対策を行った結果、岡山県や岐阜県、また熊本県等地方の小学校にも「ことばの教室」が設置された(田中・滝澤, 2015)。

このように、小・中学校で「ことばの教室」の整備体制が進められる一方、幼児を対象とした「ことばの教室」(以下、「幼児ことばの教室」)の制度化は遅々として進まなかった。田中(2014)は、幼児ことばの教室の特徴として、地方公共団体等の行政や小学校

* 熊本大学教育学研究科

** 熊本市立向山幼稚園

教員等の支援者により開設され、障害乳幼児の言語の発達課題を支援する場として機能してきたと指摘する。また、田中・瀧澤（2015）は、小（中）学校に設置された「ことばの教室」の支援対象が国の制度に基づき「学齢児」とされていたことが、幼稚園の支援体制の整備が進まなかった理由であるとし、幼児ことばの教室が、教育、福祉、医療領域の中で「身近な敷居の低さ」と「専門性」との両方の特質をあわせ持つ「地域性」に応じて展開されてきた支援の場であったと論じている。

1980年代においては、福祉行政管轄が多くを占めていたが、たとえば神野（2006）による岐阜県の調査では、親の会の活動を基盤に1972（昭和47）年に養護訓練センターが設置されてから、65カ所の障害児通園事業所が設置において、「地域療育」として幼児を対象とした「ことばの教室」が開設されていったことが明らかになっている。1990年代以降では、「単独経営」や「共同経営」等、「幼児ことばの教室」の経営形態が複数見られることが確認されているとはいえ、「幼稚園型」である「幼児ことばの教室」が幼稚園内にあったのは1機関のみであり、1996年以降は「幼稚園型」の分類そのものが消失している（田中・瀧澤，2014）。田中・瀧澤（2014）は、「幼児ことばの教室」の展開過程においては、小（中）学校「ことばの教室」の機能拡充による「幼児ことばの教室」の機能的整備という設置施策がとられたと指摘した。

また、小林・久保山（2001）は公教育における幼児を対象としたことばの指導（教育相談）に関する調査を行い、「実施している」と回答した教員は約65%であったが、その内の約70%は担当者が配置されていないことや、担当者が配置されている場合でもその80%が小学校「ことばの教室」内で小学校教員が担当していると報告している。また、「教育相談・指導による特徴」として、幼稚園教諭等担当者が配置されている場合には、早期対応・改善、一貫した指導、子育て相談等においてメリットがあった。しかし実際には、小学校教員が兼務発令を受けたり、本務に支障のない範囲で幼児の教育や相談を行ったりすることが多いため、「幼児は指導対象児としてカウントされない」ことによる「時間的・精神的負担が大きい」ことや「教材の準備が十分に行えない」こと等の問題点があることが指摘された（宮川ら，2008；小林・久保山，2001）。

2007（平成19）年度からは特別支援教育が推進されているが、公教育における「幼児ことばの教室」は、一部の都道府県・市町村で新しく開設されている（国立特別支援教育総合研究所識者会議，2020）。久保山（2013）は、特別支援教育制度開始以降の公教育

における「幼児ことばの教室」の設置・運営形態について、①小学校内に設置されており、市教育委員会が運営している場合や、「〇〇小学校ことばの教室（幼児部）」等部門として運営されている場合、②幼稚園内に設置され、「〇〇幼稚園ことばの相談室」等として運営されている場合、③教育センター内に設置され、「〇〇市幼児言語教室」等として運営されている場合、④教育的サービスとして小学校教諭が指導している場合があると述べている。

2. 熊本市における「幼児ことばの教室」の展開過程

熊本市教育委員会（1994）は同市内の小学校「ことばの教室」について、1968（昭和43）年に慶徳小学校に設置されたのを皮切りに、1978（昭和53）年健軍小学校に、1981（昭和56）年出水小学校に設置が続いたと述べている。

慶徳小学校「ことばの教室」を設置した背景として、①開設前年の1967（昭和42）年9月に熊本市議会で一保護者の訴えがあったこと、②熊本市教育委員会も必要性を認識していたことから開設に向けた動きが本格的に始まったことがあげられている（熊本日日新聞，1968）。さらに、交通が便利であり、「校舎の融通がきく」ことから慶徳小学校に設置されたことが述べられている。また、開設された「ことばの教室」の対象児については、「①発音の異常な子、②声の異常な子、③どもり、④ことばの発達が遅れた子、⑤みつくち、口ガイ裂（ママ）に伴う言語障害の子、⑥脳性マヒに伴う言語障害の子、⑦難聴に伴う言語障害の子」の7種であったと記載されている（熊本日日新聞，1968）。

続いて幼児を対象とした「ことばの教室」については以下のように記されている（熊本市教育委員会，1994）。

幼児を対象とした「ことばの教室」は、1982（昭和57）年、熊本市立五福幼稚園に「ことばの治療教室」として試行設置された。当初から専任の幼稚園教員2人が担当している。翌年の1983（昭和58）年には、統合された熊本市立熊本五福幼稚園に「ことばの治療教室」が正式に開設されたが、公教育における「幼児ことばの教室」としては九州で初めての設置であったため、3人の担当教員の指導が注目された。また、1983（昭和58）年8月には、熊本五福幼稚園の隣に「ことばの治療教室」専用である2階建て3教室の建物が新築された。

このように、開設当初から専任教員が配置され、専用の建物が新築されるといった充実した体制が構築された例は、田中・瀧澤（2015）や、小林・久保山（2001）

の「幼児ことばの教室」に関する全国調査の結果から見るとまれな例であるといえる。

現在の熊本市立幼稚園と「幼児ことばの教室」の現状については、「令和3（2021年）8月市立幼稚園における特別支援教育等に関する検討委員会報告書」に報告されている（熊本市教育委員会，2021）。そこには、幼稚園の定員充足率が低下するなかで、保護者からの「ことばの教室」へのニーズが高く、2園目の「ことばの教室」を開設したことが記載されている。しかし、ここに至る経緯についての詳細は明らかにされていない。

幼児ことばの教室の展開過程については、特に北海道の「幼児ことばの教室」を調査しているものが多く、池田（2002）、田中（2014）、田中・瀧澤（2015）、田中（2018）等がある。池田（2002）は、1973（昭和48）年、釧路市に開設された「幼児ことばの教室」が公的に認められた最初の教室であること、田中（2018）は、1980年度に都道府県別で北海道が「一番多くのことばの教室が設置された先駆的自治体である」ことを指摘した。

しかしながら、それらの調査は文献等の資料をもとに調査されているものがほとんどであり、開設の経緯や担当者・幼児の実態の詳細は明らかにされていない。

3. 本研究のねらい

熊本市立幼稚園の「ことばの教室」については、主に熊本市教育委員会（1991）と熊本市教育委員会（1994）とに概説されているが、その展開過程における、幼児や教員の実態、保護者との連携等の詳細についての検討は不十分である。

そこで本研究では、熊本市立幼稚園の「ことばの教室」が果たしてきた役割をもとに、公教育下における幼児ことばの教室の役割の示唆を得ることをねらいとし、熊本市立幼稚園「ことばの教室」の発展経緯を整理・検討したうえで、発展段階区分別の実態を明らかにしたい。

II. 方法

1. 文献の収集

本研究では、残存資料や記念誌、教育刊行物、新聞記事等を用いて、文献的検討を行う。調査対象時期は熊本市立幼稚園「ことばの教室」が試行設置された1982（昭和57）年～2021（令和3）年度とする。

2. 面談調査

(1) 対象者

面談調査の対象者について、勤務歴、勤務年度を表

表1 面談調査の対象者

対象者	勤務歴	勤務年度
A 教諭	・熊五ことばの治療教室	1995～2006
	・熊五ことばの教室	2007～2017
	・五福ことばの教室	2018～2021
B 教諭	・熊五ことばの治療教室	1990～2006
	・熊五ことばの教室	2007～2015
	・碩台ことばの教室	2016～2021
C 教諭	・五福幼稚園ことばの治療教室	1982
	・熊五ことばの治療教室	1983～1994
D 教諭	・熊五ことばの治療教室	1993～1997
E 教諭	・熊五ことばの治療教室	1983～1989
	・碩台ことばの教室	2014～2015

1に示した。なお、対象者は以下でA教諭、B教諭、C教諭、D教諭、E教諭と呼ぶ。

(2) 手続き

面談調査では、「五福幼稚園ことばの治療教室」が試行設置された1982（昭和57）年から現在に至るまでを、各年代を踏まえながら幼児、教師、保護者、関係機関との連携の4つの柱を設定した。面談調査は2021年11月から2022年1月の間にそれぞれ約1～2時間実施し、ICレコーダーで録音した。

(3) 倫理的配慮

対象者には、面談調査前または面談調査時に研究の概要や調査方法を説明した。また、得られたデータは本研究以外の目的で使用しないことを文書や口頭で説明し、同意を得た。

III. 結果と考察

1. 時期区分の検討

熊本市立幼稚園「ことばの教室」の歴史に関する文献的検討や面談調査等を参考にし、3つの時期区分に分類し、順に、「萌芽期」、「発展期」、「拡充期」とした。

まず、熊本市立幼稚園「ことばの教室」開設前後や、指導方法の模索、幼児の募集・確保等が行われた時期を「萌芽期」と名付け、1982（昭和57）年・1983（昭和58）年を対象時期にした。場合によってはこれ以前の時期も「萌芽期」に含めるものとする。

次に、入級児や教育相談件数の増加により「3教室4担任（3教室を使って4人の担任が指導）」となったことや、県や九州で開催された「熊本県難聴・言語障害教育研究会（現名称 熊本県難聴・障がい教育研究会）」、「九州地区難聴・言語障害研究会」（以下、「県難言研」「九難言研」）における提案が頻繁に行われ、「ことばの教室」が周知され始めた時期を「発展期」と名

表2 熊本市立幼稚園「ことばの教室」関連年表

年度	熊本市立幼稚園「ことばの教室」関連事項	その他の動向
昭和 43 (1968)		・慶徳小学校言語治療教室開設
昭和 57 (1982)	・五福幼稚園に言語治療学級「ことばの治療教室」の試行設置	
昭和 58 (1983)	・熊本幼稚園と五福幼稚園が統合され「熊本五福幼稚園」設立 ・熊本五福幼稚園に幼児言語治療学級「ことばの治療教室」正式開設	・市立幼稚園園児数の減少
昭和 60 (1985)	・九州難言研熊本大会で公開発表 (VTR)	
昭和 61 (1986)	・熊本五福幼稚園ことばの治療教室が市教育委員会委嘱研究を実施	
平成 5 (1993)	・熊本五福幼稚園ことばの治療教室開設 10 周年記念式典挙行	・通級による指導の制度化
平成 10 (1998)	・熊本五福幼稚園ことばの治療教室への相談件数が大幅に増加	
平成 11 (1999)	・熊本五福幼稚園ことばの治療教室で臨時的に3学級4担任 (1年のみ)	・熊本市こどもの発達相談窓口開設
平成 13 (2001)	・幼稚園経営研修会 (熊本大会) で熊本五福幼稚園ことばの治療教室紹介, 視察増加	
平成 18 (2006)	・熊本五福幼稚園ことばの治療教室への通級希望や教育相談が大幅に増加	
平成 19 (2007)	・熊本五福幼稚園ことばの治療教室から「ことばの教室」へ名称変更	
平成 20 (2008)		・熊本市子ども発達支援センター開設
平成 21 (2009)	・熊本五福幼稚園「ことばの教室」教室増設による職員の補充	
平成 22 (2010)	・熊本五福幼稚園「ことばの教室」相談件数 200 件超と増加 ・職員増員の要望書を教育委員会へ提出	
平成 23 (2011)	・県ことばを育てる親の会会長視察・教室増設の要望提出 ・職員増員等の要望書を提出	
平成 24 (2012)	・教育政策課視察 (特別支援教育推進計画作成に向けて) ・県ことばを育てる親の会がパブリックコメントで意見提出	
平成 25 (2013)	・熊本市教育政策課より視察 (教室新設に向けて)	
平成 26 (2014)	・熊本市立碩台幼稚園に「ことばの教室」を新設 ・熊本市立幼稚園「ことばの教室」職員数が五福・碩台両園で計 10 人に ・両園「ことばの教室」入級希望者大幅に増加	・熊本市「コア幼稚園」として特別支援教育の推進の方針
平成 30 (2018)	・熊本五福幼稚園を民間移譲 (市立幼稚園計 6) ・民間園に隣接して「向山幼稚園五福ことばの教室」として継続	
令和元 (2019)	・熊本市立幼稚園に「あゆみの教室」開設	
令和 3 (2021)	・熊本市教育委員会「市立幼稚園における特別支援教育等に関する検討委員会」設置	

付け、1984 (昭和 59) 年度～2006 (平成 18) 年度を対象時期とした。

最後に特別支援教育が開始され、「ことばの教室」増設と職員補充のための動きが本格的に始まり新たに「碩台ことばの教室」が開設された時期を「拡充期」と名付け、2007 (平成 19) 年度～2021 (令和 3) 年度までを対象時期として検討・分析した。

2. 萌芽期：1982 (昭和 57) 年・1983 (昭和 58) 年 (1) 設置の経緯

熊本市立幼稚園の「ことばの教室」は 1982 (昭和 57) 年に熊本市立五福幼稚園に「ことばの治療教室」として試行設置され、1983 (昭和 58) 年、統合された熊本五福幼稚園に正式開設された。なお以下では、熊本市立幼稚園「ことばの教室」について、その名称の変遷に応じて、1982 年の試行設置時を「五福幼稚園ことばの治療教室」、1983 年正式開設の「熊本五福幼稚園ことばの治療教室」を「熊五ことばの治療教室」、2007 年名称変更後の「熊本五福幼稚園ことばの教室」を「熊五ことばの教室」、2014 年新設された「碩台幼

稚園ことばの教室」を「碩台ことばの教室」、2018 年の熊本五福幼稚園閉園後向山幼稚園に付設後の「向山幼稚園五福ことばの教室」を「五福ことばの教室」とそれぞれ略称で呼ぶこととする。表 2 に、関連年表を記す。

熊本市教育委員会 (1994) では、熊本市立幼稚園に「ことばの治療教室」が設置された背景として、熊本幼稚園と五福幼稚園が統合され、熊本五福幼稚園が設立されたこと、全国的にことばの早期治療を求める声が高まり、「言語治療の経験がもっとも深い慶徳小学校などに、幼児のことばについて相談に訪れる人が多くなった」こと等を挙げている。

熊本五福幼稚園 (1983) では、両園の統合について、①「幼児数の減少」、②「熊本幼稚園敷地が白川改修に関係」していたこと、③「移転先用地の確保が困難」の 3 点を指摘している。熊本市立熊本幼稚園と熊本市立五福幼稚園は、1887 (明治 20) 年と 1896 (明治 29) 年にそれぞれ設立された歴史ある幼稚園であるが、両園の統合と熊本市立幼稚園「ことばの治療教室」の設置との間にどのような関係があるのだろうか。

これについて、C教諭への面談からは、熊本五福幼稚園が統合し熊本市立幼稚園が8園から7園になったことから、何か新しい取り組みを始めようという動きがあったという聞き取りが得られた。C教諭はさらに、その他の開設理由について4点をあげた。すなわち、①「国連・障害者10年（1983年～1992年）」が定められたことなどをきっかけに、熊本市の教育委員会でも特殊教育を推進する動きがあったこと、②慶徳小学校「ことばの教室」の教員が幼児指導を兼ねて行っており、幼児の相談件数が増加したこと、③熊本五福幼稚園の場所が市中心部にあり、交通の便が良かったこと、④熊本市内の特殊学級の教員や熊本大学の教員をスーパーバイザーとした、「日曜学級」の取り組みの蓄積があったことである。

「日曜学級」については、E教諭から、以下の聞き取りが得られた。

当時障害がある子どもたちが入れる幼稚園や保育園は、数園しかありませんでした。それで、「日曜学級」では、幼稚園や保育園に通えない子どもたちを集めて幼稚園のような活動を行っていました。大学の先生や特殊学級の先生方がスーパーバイザーになられ、熊大生、保育大生、九州女学院短大生が、子どもたちに必要な療育を個別とグループで行っていました。熊本市の事業の一貫だったので、予算もでていて、良い遊具等が沢山ありました。（中略）保護者や子どもさんたちはとても楽しみにして通っておられました。日曜学級や自閉症、ダウン症のグループ活動などは、子どもたちにとって唯一の療育の場だったと思います。

「日曜学級」については、C教諭からも同様に「幼稚園に通えず、日曜学級を唯一の療育の場としている幼児もいる現状があった。」という聞き取りが得られた。

開催されていた「日曜学級」には、「熊五ことばの治療教室」の正式開設とその前年の試行に携わったC教諭やD教諭、E教諭がボランティアとして参加していた。障害がある幼児にとっての療育の場、さらには居場所でもあった「日曜学級」では、それらに参加していたボランティアにとっても子どもと家族のおかれた立場を目の当たりにする機会であったといえる。C教諭からは、「（障害がある子どもが幼稚園に通える）このような公立幼稚園であってほしい」という思いをもつきっかけになったという聞き取りが得られた。

このようにして1982（昭和57）年に試行設置された「五福幼稚園ことばの治療教室」は、保育室の1室が当てられ1教室2担任で実施された。試行設置に携わったC教諭は、担当教員として着任する前年に、



図1 熊本五福幼稚園ことばの教室建物
出所：熊本市立向山幼稚園五福ことばの教室所蔵写真

熊本市の教育委員会から派遣され、1年間F大学で国内研修を行い、言語障害教育について学んでいる。このような経緯から翌年の1983（昭和58）年には、2教室3担任で「熊五ことばの治療教室」が正式開設された。同年8月には熊本五福幼稚園に隣接する土地に、総予算約5000万円で、「熊五ことばの治療教室」専用の建物（図1）が新築された（熊本五福幼稚園、1983）。

「ことばの治療教室」を正式開設するうえで、熊本五福幼稚園の隣接地が建築用地として熊本市が取得する際の状況について、C教諭から以下の聞き取りが得られた。

これ（「熊五ことばの治療教室」専用の建物の設置）に関して、最も困難だったのは隣接地の取得であり、地主の方を探すということもしながら、何度も頓挫しそうになったという話を本件に尽力された方からお聞きしました。多くの方々のお力添えで「ことばの治療教室」の建物は完成しました。この建物に値することばの指導をしっかりと行わなければと心新たにすることを思い出します。

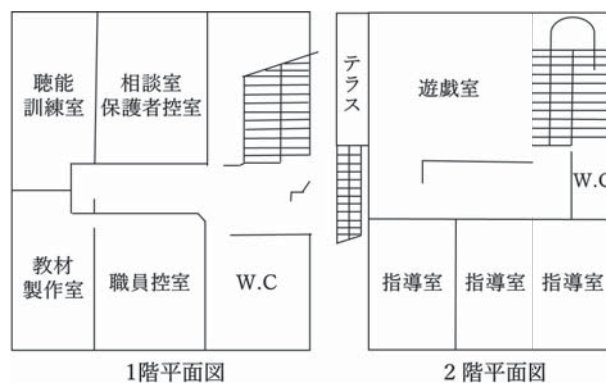


図2 熊本五福幼稚園ことばの治療教室平面図
出所：熊本五福幼稚園ことばの治療教室（1983）をもとに筆者ら作成

図2に2階建て3教室で新築された「熊五ことばの治療教室」の平面図を示す。このことについて、E教諭からも以下の聞き取りが得られた。

「ことばの教室」は空き教室などを改築して作りましたが、熊本五福幼稚園の「ことばの教室」は、沢山のことを考えられて作られていて、設備も素晴らしかったです。当時は3担任ということだったので、先生方の職員室と保護者の控室と、1階に聴能訓練室（防音で聴音検査等ができる部屋）がありました。それから、2階に3つの指導室と、3つの指導室をつないだ大きさぐらいのプレイルームがあり、トイレも1階と2階にあって、ほんとに「ことばの教室」のための施設でした。（中略）

1983（昭和58）年9月に「熊五ことばの治療教室」の新築を記念し落成式が実施された（熊本五福幼稚園、1983）。熊本日日新聞（1983）は、「熊五ことばの治療教室」の落成式に、保護者や障害教育関係者ら50人が出席したと記載している。また、同記事では完成した専用の建物について、「相談室、聴能訓練室、防音装置などを備えた指導室、遊びながら治療効果や訓練法を判断するための遊戯室などがある」と記している。

専用の建物完成に伴い、幼児の募集や指導が本格的に始まった。

(2) 入級児の実態

熊本市教育委員会（1991）は、昭和58年に正式開設された「熊五ことばの治療教室」が公立の幼稚園としては九州で初めての設置であり、3人の教諭が着任するとともに、「親の会」の活動の促進や、教室の新築、教材・教具の整備がなされ、「指導の実績があがるにつれ、新聞、テレビにもとりあげられた」と言及している。

入級児の募集に関しては、C教諭から以下のような聞き取りが得られた。すなわち、新聞やテレビ等に「熊五ことばの治療教室」が取り上げられたことで多くの幼児が集まることが予想されたため、入級にあたっては年長児のスピーチ面に課題のある幼児が優先されていたことである。また、E教諭からも、九州で初めての設置となったため、「ことばの治療教室」担当教員

と市教育委員会が連携しながら、手探りの状態で入級児の募集が行われていたという聞き取りが得られた。

開設当初の障害種別入級児は表3の通りであり、難聴児も受け入れていたことがわかる。

熊本市教育委員会（1991）によると、萌芽期には1対1の個別指導に加え、教育相談や「母親教室」が実施され、市内外の乳幼児を対象として様々な相談に乗っていた。主に保護者の相談の場であった「母親教室」については、E教諭から、①吃音のグループ、②言語発達遅滞のグループ、③口蓋裂のグループの3つのグループに分かれて月に1回実施されていた、という聞き取りが得られた。

続いて、対象児や実施内容については、E教諭から以下のような聞き取りが得られた。すなわち、E教諭が担当した口蓋裂グループには乳児から年中児までの子どもをもつ10人以上の母親が参加していたこと、通級対象が年長児だったため、通級指導をうけることができない子どもをもつ保護者が様々な悩みを抱えていたこと、母親同士の交流活動が実施されていたこと等である。また「母親教室」は、当初、小学校の「ことばの教室」でも実施されたことや、その後に「保護者教室」という名称で、全設置校合同になったという聞き取りが得られた。

(3) 指導方法の模索

上述したように年齢の幅が広く、さまざまな言語障害のある幼児が入級していたことで、「指導の効果をあげることが難しかった」（熊本市教育委員会、1991）という指摘もある。これについてC教諭は、「県難言研」や「九難言研」等の言語指導に関する研究会が学びの場としての役割を果たしていたと述べた。熊本市立幼稚園「ことばの教室」は、試行設置された1957（昭和32）年4月に「県難言研」や「熊本県言語障害児研究会」に加入し、言語に関する研究会や親の会主催の講演会等を自ら開催している（熊本五福幼稚園ことばの教室、2013）。「九難言研」においても、1983（昭和58）年に「熊五ことばの治療教室」が正式開設された際、担当者が「幼稚園における言語治療学級の実態と問題点」について発表を行っている（九難言研第7回長崎大会、1983）。A教諭からは、「県難言研」や「九難言研」では、主に小学校や中学校の「ことばの教室」や難聴特殊学級等の担当教員が参加しているため、指導方法や教材等を学んだり、指導について相談することができる貴重な機会であったという聞き取りが得られた。

また、指導方法を模索するにあたっては、教育の分野だけでなく、医療に関する幅広い知識が必要であった。知識獲得の方法について、E教諭からは、指導幼児が医療機関に診察に行く際に関係者から了解を得て

表3 開設時の障害種別入級児（人）

年度	種別 構音 障害	吃音	口蓋裂	言語 発達	難聴	合計
1982	9	11	1	5	2	28
1983	8	3	0	7	5	23

同行し、ST（言語聴覚士）²⁾ から専門的な知識を学んだこと、また医学書で勉強したという聞き取りが得られた。さらに、E教諭は当時の状況について、「STの先生のお蔭で、手術や歯列矯正など就学後に必要なことが学べました」と述べている。

3. 発展期：1984（昭和59）年～2006（平成18）年

(1) 相談件数・入級児の増加

発展期では、相談件数等の増加が顕著にみられた。1998（平成10）年度は、相談件数が100を超え、1999（平成11）年度には、臨時的に3教室4担任となり、通級児も20人以上となった。

萌芽期から拡充期までの相談件数と入級児数の推移を図3に示した。なお図3では、継続指導児すなわち、指導期間終了後も指導を継続した幼児を含む人数を示している。

発展期に「熊五ことばの治療教室」の指導教員であったB教諭からは、以下の聞き取りが得られた。

通級希望児の増加に伴って、指導の枠を変え、16時からの指導を入れて1日5枠で行っていたことがありました。（中略）指導回数を月1回～2回にしたりして、なるべく希望する子どもに指導ができるよう対応していたように思います。しかし、16時以降は幼児の体力的に厳しい所面があり、増やしたのは1年間だけでした。

入級児数の増加の背景に関する明確な理由は不明であるが、C教諭とE教諭は、研究会等の発表やメディアによる認知度の上昇を指摘している。また、2001（平成13）年以降、ドイツや韓国等の海外や、山口県や鹿児島県等の県外からの視察が盛んになり、教育相談件数や入級児がますます増加していったことがうかがわれた（熊本市立熊本五福幼稚園、各年度）。

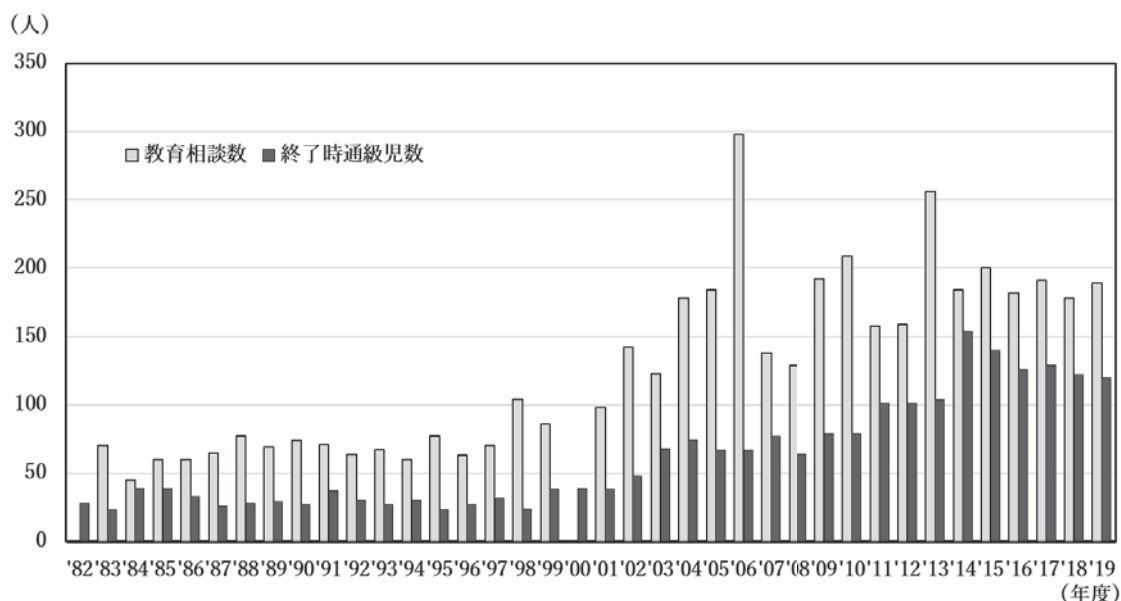
(2) 入級プロセスの構築

1988（昭和63）年頃の「熊五ことばの治療教室」における入級プロセスについては、以下のように記載されている（熊本市教育委員会、1991）。

教育相談の申し込みは個人によるものと、各関係機関からの紹介によるものがある。相談の結果、定期的な指導を必要とするものには、入級指導、継続指導を行うが、その判定は、熊本市適正就学指導委員会において行われる。

入級児の検査や面接については、E教諭からも「熊五ことばの治療教室」開設当初から担当教員が時間をかけて実施していたことや、それらの結果をもとに、「熊本市適正就学指導委員会」³⁾ において最終的に判定された等の聞き取りが得られた。

その後「熊五ことばの治療教室」では、2000（平成12）年には「田中ビネー検査」について、2005（平成17）年に、「諸検査からの子どもの発達のみとり」



※1982年、2000年は教育相談数不明。

図3 教育相談件数と年度終了時入級児数の推移

出所：熊本五福幼稚園「ことばの治療教室」「ことばの教室」（各年度）を基に筆者ら作成

というテーマで園内研修が実施されており、継続して入級児の検査や面接が実施されてきたことがうかがえる。

(3) 指導方法の確立

1985(昭和60)年度には「熊五ことばの治療教室」で「類似した障害のグループで指導」したことや、「知恵遅れ(ママ)の子どもを受け入れている」ことが報告されている(九州地区難聴・言語障害教育研究会第9回熊本大会, 1985)。発展期の指導方法については、E教諭への聞きとりからも、「同じような障がいがある幼児をグループで指導」したことや、「口蓋裂がある場合は軽度の知的障害があるお子さんも受け入れた」ことが確認された。

1992(平成4)年には、九難言研で熊本市立幼稚園に加え、宮崎県恒富幼稚園「幼児ことばの教室」による発表も行われている⁴⁾。

1994(平成6)年および1995(平成7)年には、「母と子」の視点から発表が行われているが、1992(平成4)年度から「熊五ことばの治療教室」内で「ことばを育てる親子関係づくり」というテーマのもと、研究を実施したことが報告されている(熊本市立熊本五福幼稚園, 各年度)。

「研究紀要(平成4年度・5年度教育委員会研究委嘱)」では、主題設定の理由として、これまでの指導から、「ことばは人との関係に結び付いており、人との気持ちの通じ合いが、しっかりできること」という土台があることが前提条件だということを見出し、そのなかで「幼児が人との関係を築いていく上で基本になる」のが母親との関係であると考えたことを挙げている(熊本市立熊本五福幼稚園, 1993)。実践としては、母親と子どもが「共に楽しく過ごす遊びの時間」の設定や、保護者会等がある。研究結果では、母親や子どもの姿から、「幼児の今、現在が、より楽しく充実したものとなることは、母親の今も、充実してくること」ととらえ、教師自身も学びが得られたことが報告されている。このように「熊五ことばの治療教室」は発展期に、幼児期段階の特性を踏まえた指導実践を重ねながら、幼児や保護者の支援方法を深化させていった。

熊本市立熊本五福幼稚園(各年度)によると、1988(昭和63)年は、難聴幼児通園施設ひばり園から講師が招かれ、「難聴児を育てること」とテーマで講演会が行われている。これは、軽度ではあるが、難聴児が通級していたことによるとと思われる。

1997(平成9)年には、熊本県LD親の会の会長を招いて「発達に偏りがある幼児の指導内容をどのように考えるか」というテーマで研究会が実施された。幼児の実態に対応するために、言語障害だけでなく他の

障害についての園内研修の場が確保され、職員の専門性の向上が図られた、と捉えられる。

IV. まとめと今後の課題

本研究では熊本市立幼稚園の「ことばの教室」の発展経緯について、萌芽期と発展期に焦点をあて検討した。萌芽期には、熊本五福幼稚園の統合や専用の建物への移転等の環境の変化の中で、幼児への指導方法や教育相談の対応を試行錯誤したこと、発展期には、入級児や教育相談数が増加するなかで、熊本市教育委員会等と連携しながら幼児一人一人に合わせた指導方法を深化していったことを明らかにした。

熊本市立幼稚園「ことばの教室」の発展経緯の分析を通して、幼稚園における「幼児ことばの教室」の役割について以下の2点が挙げられた。

- ① 「言語発達の専門的機関」として、ことばの支援に関する専門性の向上を図ること
- ② 「幼児教育の専門機関」として、幼児期の全体的な発達を見通したことばの支援を行うこと。

久保山(2013)は、「幼児ことばの教室」の役割について、「ことばの遅れを主訴とする子どもや保護者の早期からの一貫した重要な支援の場」であることや、「今後のインクルーシブ教育システム充実に大きく寄与するもの」である一方で、「市町村ごとに異なっており、十分に整備されていない現状がある」と述べ、運営体制や整備の充実が求められていると指摘した。

これに対して、本研究で分析の対象とした熊本市立幼稚園「ことばの教室」では、過去40年に渡り継続的に、幼児の「教育機関」としての役割と、「ことばの支援機関」としての役割を同時に担いながら、ことばの遅れを主訴とする子どもや保護者のニーズに対応してきたことを示した。

今後の課題として、熊本市立幼稚園「ことばの教室」について、①教育・福祉行政との関連で見た検討、②親の会の果たした役割に着目した検討を行う必要がある。

V. 要約

本研究のねらいは、九州で初めて設置された公教育における熊本市立幼稚園の発展経緯を明らかにし、公教育における「幼児ことばの教室」の役割に関する示唆を得ることである。

資料収集、面談調査の結果をもとに、発展経緯を萌芽期(1982~1983年)、発展期(1984年~2006年)、拡充期(2007年の特別支援教育開始後2021年まで)の3期に分け、本研究では主に萌芽期と発展期について

て検討した。その結果、①萌芽期には言語障害のある幼児への相談支援体制が未整備であるなか、年長児に限らず幅広いニーズのある幼児の対応や指導方法が模索されたこと、②発展期には入級希望・教育相談対応児数の急速な増加が見られ、幼児の言語発達を促す集団指導等の指導実践が蓄積されたことを明らかにした。

熊本市立幼稚園「ことばの教室」の例から、公教育における幼児ことばの教室は、言語発達の専門機関としての役割に加え、幼児期の特性を踏まえた指導実践を行うという2つの役割を果たしてきたと考えられる。

謝辞

本研究は、熊本市教育委員会総合支援課、熊本県難聴・言語障がい教育研究会事務局、熊本市立山向山幼稚園および熊本市立碩台幼稚園園長のご協力なしに進めることはできませんでした。また、熊本市立幼稚園ことばの教室の旧担当者3名、現担当者2名の先生方には面談調査にご協力いただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

註

- 1) 2007(平成19)年の特別支援教育開始以降、「特殊学級」は「特別支援学級」となった。
- 2) 1997(平成9)年に「言語聴覚士法」が成立し国家資格となった。本研究では、国家資格になる以前についてST(Speech Therapist)と表記している。
- 3) 現在は、就学支援委員会。
- 4) 九難言研第16回大会での発表資料集によれば、1988(昭和63)年度に恒富幼稚園「幼児ことばの教室」が恒富小学校内に設立され、2クラス2担任制であった(九州地区難聴・言語障害研究大会、1992)。本稿執筆時点では「延岡市幼児ことばの教室」が設置されている(宮崎県難聴・言語障がい教育研究会、2022)。

文献

- ・ 熊本五福幼稚園(1983)熊本市立熊本五福幼稚園統合記念誌、5-9.
- ・ 熊本市立熊本五福幼稚園(各年度)「ことばの治療教室」「ことばの教室」入級指導、継続指導、教育相談年度別件数。
- ・ 熊本市教育委員会(1991)熊本市戦後教育史・資料編、937-939.
- ・ 熊本市教育委員会(1994)熊本市戦後教育史・通史編II、853-856.
- ・ 熊本日日新聞(1968年12月20日)熊本市の断片 障害児たちに光り〜県下初の治療教室開設。
- ・ 熊本日日新聞(1983年9月7日)鉄筋の施設が完成 熊本五福幼稚園幼児言語治療学級。
- ・ 久保山茂樹(2013)ことばの遅れを主訴とする子どもに対する早期からの指導の充実に関する研究—子どもの実態の整理と指導法の効果の検討—, 国立特別支援教育総合研究所研究成果報告書(B-293). <http://www.nise.go.jp/cms/7,9722,32,142.html> (2022年6月20日閲覧)
- ・ 久保山茂樹(2020)幼児教育段階の特別支援教育に関する学びの場の現状と課題, 文部科学省 新しい時代の特別支援教育に関する有識者会議(第7回)会議資料, 資料3. (2022年6月20日閲覧) https://www.mext.go.jp/kagisiryoy/2020/03/1422997_00003.htm
- ・ 九州地区難聴・言語障害研究会(1983)第7回長崎大会。
- ・ 九州地区難聴・言語障害研究会(1985)第9回熊本大会。
- ・ 九州地区難聴・言語障害研究会(1992)第16回宮崎大会。
- ・ 松村勲由・牧野泰美(2004)我が国における言語障害教育を取り巻く諸問題—変遷と展望—, 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 31, 141-152.
- ・ 宮川麻理・三輪栄子・山川真智子・中川菜穂美・萩永みどり(2008)大垣市立公立幼稚園に設置されていることばの教室に通級する幼児の在籍園クラス担任へのアンケート調査—今後の連携のあり方における改善点をさぐって—, 岐阜大学教育学部附属特別支援教育センター年報, 15, 49-53.
- ・ 宮崎県難聴・言語障がい教育研究会(2022)〈ことばの教室〉26教室. https://cms.miyazaki-c.ed.jp/ssc03/?page_id=0 (2022年6月20日閲覧)
- ・ 田中謙(2014)北海道「幼児ことばの教室」の展開過程に関する研究—1970~1980年代における設置形態および経営形態に焦点を当てて—, 聴覚言語障害, 43, 2, 77-86.
- ・ 田中謙・瀧澤聡(2015)福祉行政・教育行政・医療行政下での「幼児ことばの教室」の展開過程の特質—北海道における設置および経営形態に焦点をあてて—, 山梨県立大学人間社会学部紀要, 10, 26-40.
- ・ 田中謙(2018)北海道「ことばの教室」の展開過程における真駒内養護学校言語治療教室の社会的機能の特質—言語障害児とその保護者への支援機能と教師教育機能に着目して—, 日本学習社会学会年報, 14, 54-63.
- ・ 神野幸雄(2006)障害のある幼児の地域療育—「白鳥ことばの教室」の取り組みについて—, 岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報, 13, 85-99.
- ・ 小林倫代・久保山茂樹(2001)地域における早期からの教育相談の場としての「ことばの教室」の役割, 国立特殊教育総合研究所, 28, 11-20.
- ・ 熊本市立熊本五福幼稚園(1993)研究紀要(平成4・5年度教育委員会研究委嘱), 24-43.